

[コラム]

江戸時代の旅

井上 有貴

愛荘町歴史研究 第1号 別刷
愛荘町教育委員会 文化振興課
2008年2月

井上有貴

一、はじめに

日本人は旅好きである。大型連休ともなると、多くの人々が日本全国あるいは海外へと旅に出掛ける。この日本人の旅好きは今にはじまったことではない。江戸時代には、すでに多くの庶民が旅に出掛けていたのである。今回は、江戸時代に秦荘地域の人々がどのような旅を行っていたかについて紹介してみようと思う。

二、江戸時代の旅

①江戸時代の旅

江戸時代も半ばになると、街道の整備などによって多くの庶民が旅に出掛けるようになる。特に文化・文政期には、庶民の間に旅の一代ブームが到来する。この背景には、貨幣経済の進展に伴い、庶民生活が豊かになったこと、農業技術の向上によって余暇が生まれたこと、出版文化の発達によって全国各地の名所旧跡を紹介する名所図会や旅のガイドブックともいえる道中記などが出版されるようになったことなどがあげられる。

②寺社参詣から物見遊山へ

江戸時代には多くの庶民が自由に旅を楽しんだように思われるが、離村や逃亡することを防ぐために領主は、庶民が自由に移動することを制限していた。しかし、寺社参詣（特に伊勢神宮は皇祖神を祀っているため容認せざるを得なかつ

た）に限っては許されることが多かった。そのため、当初は寺社参詣を目的とする旅が行われていたが、次第に寺社参詣に物見遊山が伴う旅が多くなっていった。そして、文化・文政のころになると、寺社参詣はあくまで旅に出掛けるための口実で、実際には全国の名所旧跡を巡る物見遊山の旅が多くなり、多くの庶民がそうした旅を謳歌したのである。このように、寺社参詣としての旅から物見遊山の旅へと旅の目的も変化していったのである。

三、秦荘から旅

秦荘地域ではどのような旅が行われていたのであろうか。

①秦荘の旅の様相

秦荘からの旅で盛んに行われていたと考えられるのは、伊勢参宮と善光寺参詣である。それは「伊勢参宮祝儀帳」、「善光寺参り祝儀帳」といった伊勢参宮や善光寺参詣に関する史料（ほとんどは祝儀帳の類である）が多く残ることから推察することができる。

このほかにも点数的には少ないが、北陸方面へ湯治に出掛けた際の道中記や、城崎温泉までの旅程を記した道中記（『秦荘の歴史』第二巻近世編）を確認できることから、北陸や山陰地方へ旅に出掛けるものもいたことがわかる。

また、九州地方へ商売に出掛けた際の往来手形も残されており、商用の旅も行われていたことが断片的であるがうかがうことができる。

②秦荘からの伊勢参り

江戸時代の旅において最も盛んであったのは伊勢参りである。この背景には、伊勢神宮には、天照大神、豊受大神という農業に関係する神が祀られており、農業を基礎として生活する当時の庶民と密接な関係にあったことと、御師の活動をあげることができる。もともと御師は伊勢神宮の下級神官であったが、江戸時代には全国の村や町を廻って、伊勢参宮の勧誘を積極的に行い、信者（檀家）を獲得した。また、信者が伊勢参宮を行った際には、宿泊や参拝の手配を行った。こうした御師の活動によって各村や町では伊勢講が組織され、講で伊勢参宮のための資金を積み立て、伊勢参宮を行った。

秦荘地域でも残された史料から伊勢講が組織されていたことをうかがうことができる。ある講では毎年決まった日に講員が集まり、小額の金銭が徴収されていたことが伊勢講文書に記された掟書により確認することができる。また、帳簿から講では積み立てた資金を貸し付けるなどの資金運用が行われていたこともうかがうことができる。このように伊勢講を組織し、その中で資金を積み立てることによって、伊勢参宮を行うことができたのである。

では秦荘地域からどのようなルートを用いて、伊勢参宮を行ったのだろうか。残念ながら江戸時代の参宮ルート特定することができる史料は確認することができないが、明治十一年（一八七八）に行った伊勢参宮の史料の中に秦荘から伊勢までの旅程が記されている。ここから江戸時代における参宮ルートを探ってみたいと思う。明治十一年に行われた伊勢参宮では、秦荘を出発後、八日市―岡本―鎌掛と御代参街

道を通り、東海道第四九番目の宿場である土山宿へと至っている。土山からは東海道を通って関宿へ。関宿から伊勢別街道を利用して津へと向かい、津からは伊勢参宮街道を南下して外宮に至っている。この史料は明治十一年の史料ではあるが、恐らく江戸時代においても同様のルートを用いて伊勢参りが行われていたものと思われる。

四、むすびにかえて

最後に、他地域から秦荘を訪れた旅行者の事例を紹介してむすびとしたい。

日野の商人である中井源左衛門光熙は文政九年（一八二六）に近江西国三十三カ所への巡礼で金剛輪寺に参詣に訪れている（『秦荘の歴史』第二巻近世編）。近江西国三十三カ所は寛文（一六六一―七二）頃に成立したとされ、札所は近江国全域に分布する。金剛輪寺は近江西国三十三カ所の二五番札所となっており、中井以外にも金剛輪寺には多くの巡礼者が訪れていたと思われる。

また秦荘地域にある矢取地藏尊（仏心寺）は江戸時代の地誌に紹介されるなど有名で、開帳が行われる際には近隣地域から参詣者があつたようである（『秦荘の歴史』第二巻近世編）。このように秦荘地域には、近隣あるいは広域の人々が訪れていたことをうかがうことができるのである。

江戸時代は庶民による旅が盛んだったといわれるが、秦荘地域の事例からもそうした事実をうかがい知ることができるのである。

（愛荘町教育委員会文化振興課 学芸員）